

## 去りがタイ、タイ

前大使 佐藤重和

帰国を目前に控えこの原稿を書いています。この原稿が掲載されるのは、「クルンテープ」紙の5月号ということですので、ご覧頂いているこの時には、私は、もうタイを去っていることとなります。タイ在任中にお目にかかっていたながら、きちんと辞去の御挨拶をできなかった方々には、この拙文でその旨の御挨拶をさせていただきます。また、在任中もっともっと多くの方にお会いしたかったのですが、お会いできなかった方々には、そのような気持ちをここで伝えさせていただきます。

2012年11月、タイに大使として着任して2年5カ月、私どもの通常の任期であり、決して短いというわけではありませんが、帰国の辞令をもらい3月末日に帰国の運びとなりました。それが判明した時点ではそれほどでもなかったのですが、さすがにあと半月、あと10日となってくると、妙にタイを去りたい気持ちが募ってきて鬱然となります。英語にYour days are numbered. という表現がありますが、そんな気持ちです。

勿論、どの任地であっても、一度生活した地には、それなりの思いがあり、そこを去ることには一抹の寂しさが付きまとうのが常ですが、タイにはそう思わせるものが濃厚なような気がします。それは私だけでなく、多くの日本人当地在勤者の方々に見られものではないでしょうか。そして、実際に、その思い断ち難く、当地にそのまま残ってしまう方もおられるようです。

そう思わせるものは何かと考えてみます。勿論、人それぞれですし、ゴルフが沢山出来るとか、個別の理由はいろいろあると思います。しかし、そうした個別事情を超えて、我々日本人にそうした思いを起こさせるのは、私の独断で申し上げれば（と言うか、多くのタイに関する書物に、こうしたことはたくさん書かれており、私のオリジナルでは全くありません）、それは、タイの「ゆるさ」、「寛容さ」ではないかと思います。

人間の本质は、アリというよりキリギリスです。出来れば楽をしたい、だれもが好き好んで気遣いと緊張を強いられる世界に身を置きたいとは思いません。車の込み具合を勘案しながら、約束の会合に間に合うためには何時何分にここを出なくてはならない、そんなことを何度も何度も考えるよりも、すべては順調に動く、仮に遅れた場合にはお互いに問題にしないという前提で行動した方がはるかに健康的です。例えば、私が離任するに当たっては、政府高官や王室の方にご挨拶に伺うのですが、その際のやり取りでも、こちらでは、私が日本の感覚で想像するよりもはるかに自由なやり取りで、こちらで、あれも言わなくては、これも言わないと礼を失することになるかな、とかいろいろ考えながらお邪魔すると、そんなかしこまった雰囲気はなく、タイ・スマイルで迎えてくれることが多く、かえって拍子抜けすることもありました。さらに、言わせていただければ、ちり一つ落ちていない道路とか、あまりに整然とした部屋は、我々に緊張感をもたらすものです。ある程度雑然とした雰囲気は、我々の気持ちを和ませます。私は、若いころから、アジアの雑

踏が好きだったのですが、そのバイタリティに魅せられると同時に、雑踏の中に身を置く心地よさを味わっていたのだと思います。犬が道路の真ん中で、何の気遣いもなく堂々と寝そべっている・・・心が安らぎます。

勿論、そんな「ゆるさ」に苛立ちを感じ、即刻タイを立ち去りたいと思う方もおられるかもしれません。それはそれで立派だと思いますが、私は、サバイサバイ派です。

でも、サバイサバイ、マイペンライだけではいけません。締めるところは締める、ということで、タイの企業、政府機関、学術機関、いずれも勤勉かつ優秀な方が沢山おられ、それが今日のタイの発展につながってきているわけです。

でも、「ゆるさ」がそのまま締まることなく困った結果になることもあります。私が着任して間もなくにフットサルのワールド・カップというのがありました。三浦カズ選手とかも出場するというので私も張り切って何回か会場に足を運びました。でもその会場は、本来予定されていたメイン会場ではありませんでした。何年も前にバンコク開催が決まり、メイン会場の建設が行われていたのですが、なんと本番に間に合わなかったとのことで、相当スポーツ界のひんしゆくを買ったそうです。

思えば、昨年5月のクーデターも、無血クーデターという点ではほっとする部分もありますが、あれだけ政治混乱が極に達し、クーデターの可能性も取りざたされていたときに、関係の要人が皆会議に集まっていたところを一網打尽、何の抵抗もできずというのも、何となくゆるい話ではあるなと思ってしまいます。そして、そもそも、半年もデモや政府庁舎占拠で混乱が進んでいたときに、関係者の人々が、もっと「締まって」事態打開に取り組んでほしかったのにと今でも思うことがあります。

とにもかくにも、その後、バンコク市内の混乱も収拾され、市民生活にもサバイサバイのあふれる世界が戻りましたが、当時の混乱をもたらし対立の構図は何ら解消していません。国民和解が叫ばれていますが、そのための歌を歌うだけではなかなか進みません。ここはなんとかタイの皆さんに、締まって、緩むことなく、真剣に、民主政治の安定的な確立に向け、党派を超えて取り組んでほしいと思います。

筆を進めるうちに、なんだか本稿の本来の趣旨からずいぶん外れてしまったような気がします。どうしても、在任時代の仕事に直接関係するような話になってしまうところが、私のキャパシティの狭さ、筆力の乏しさです。そうした立場を離れて、個人として、路上の犬と向き合った時に、改めて安らぎを覚えます。政治状況はいろいろ動きます、まだまだ心配なところもずいぶんあります、でも、この地タイが我々にとって心地よい愛すべき地であることは今後も変わりはないと思います。そして、この国タイとずっとずっと良い関係が発展していったほしいと思います。

タイは、去りがタイ、タイであり、また来タイ、タイです。 (了)

(インラック首相表敬)



(プラユット首相表敬)



(タイ皇太子殿下表敬)

